

印欧祖語における amphikinetic type の  
名詞パラダイムの生成過程

吉田 育馬

I. amphikinetic type とは?

印欧祖語においては名詞は本来、o-語幹名詞を除き、強格（主・呼・対格）と弱格（それ以外）の間で母音交替とアクセントの移動を伴い、活用した。ただ、この中でアクセント移動を伴わないタイプは2パターンあるが（\*nóg<sup>w</sup>-t-s 属 \*nég<sup>w</sup>-t-s 「夜」に代表される acrostatic type と \*w<sub>1</sub>k<sup>w</sup>-íH<sub>2</sub>-s 属 \*w<sub>1</sub>k<sup>w</sup>-íH<sub>2</sub>-os 「牝狼」に代表される mesostatic type）、それを除くといわゆる mobile types は4つある。

1. holokinetic type

主	C <sub>1</sub> éC <sub>2</sub> -R̥-s	*még-H <sub>2</sub> -s	Gk. μέγας
対	C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -éR-m̥	*m̥g-éH <sub>2</sub> -m̥	ἄγαν 「非常に」
属	C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -R-ós	*m̥g-H <sub>2</sub> -ós	Ved. mahás 「大きい」

2. proterokinetic type (無生物)

主/対	C <sub>1</sub> éC <sub>2</sub> -C/C <sub>1</sub> óC <sub>2</sub> -C	*dór-u	Ved. dāru, Gk. δόρυ 「槍」
属	C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -éC-s	*dr-éu-s	drós: Gk. (Ion.) δένδρον 「木」 「樹」

3. hysterokinetic type (有生物)

主	C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -(C)éC/C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -óC	*pH <sub>2</sub> -tér	Gk. πατήρ
対	C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -(C)éC-m̥/C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -óC-m̥	*pH <sub>2</sub> -tér-m̥	πατέρα
属	C <sub>1</sub> C <sub>2</sub> -(C)C-ós	*pH <sub>2</sub> -tr-ós	πατρός 「父」(男性)

4. amphikinetic type (有生物・無生物)

主/対	$C_1éC_2-(C)ōC$	*wéd-ōr	Hitt. widār	≡ Gk.	ὤ δ ω ρ
属	$C_1C_2-C-ós$	*ud-n-ós	Λ <sup>υ</sup> · <sup>α</sup> · <sup>α</sup> -aš		ὤ δ α τ ο ς
					「水」(中性)
主	$C_1éC_2-(C)ōC$	*H <sub>2</sub> ék-mōn	Ved. áśmā	Gk.	ἄ κ μ ο ν
対	$C_1éC_2-(C)ōC-m$	*H <sub>2</sub> ék-mon-m	áśmānam		ἄ κ μ ο ν α
属	$C_1C_2-(C)C-ós$	*H <sub>2</sub> (e)k-mn-ós	áśnas	≡ Lith.	akmeñs
					「石」(男性)

これら4つのタイプのうち、最後のものがamphikinetic type と呼ばれるが、これはアクセントが接尾辞をとばして、語根から語尾へと文字どおり両端(amphi-)での移動が行われるからである。本稿で問題になっているamphikinetic type とはこういったものであり、これは印欧語比較形態論における用語なのである。

II. 基本母音 \*e, \*o とアクセントとの相関関係

さて、本題に入る前に印欧祖語内部における音韻的相関関係について述べておきたい。印欧祖語においては基本母音 \*e, \*o とアクセントとの間に密接な相関関係があったが、これは時代によって変化を遂げて行った。

最も新しい時代(=印欧祖語の最終段階)には \*e, \*o は強勢位置にも非強勢位置にも立ちえた。

Skt. bháratha	Gk. φέρετε < *b <sup>h</sup> ér-e-te 「あなた方運ぶ」
Skt. vacás	Gk. (詩) ὀπίσ< *wok <sup>w</sup> -ós [単属] 「声」

しかし、これは o-語幹が誕生し、語根名詞で強格による均等化が行われてからの話であって、本来は \*e と \*o は強勢位置にしか出てこなかった。

	Skt.	Gk.	IE
単主	dyáus	Z ε ú s, (Boeot.) Δ ε ú s	<*dy-éu-s 「天帝」
属	divás	Δ ι ó s, (Arg.) Δ ι Fós	<*di-w-ós

これが印欧祖語において再建される最も古い段階だったのだが、この最も古い段階から \*e/\*o が強勢位置にも非強勢位置にも現れるという最新の段階への移行はいきなり行われたのだろうか。私にはそのように思えない。やはり Szemerényi (1990:124-6) にも示唆的な言及があり、Beekes (1985:156-8) も明言しているように、両者の中間段階に強勢位置には当然 \*e も \*o も来るが、非強勢位置には \*o のみが現れて、\*e は現れないという段階があったのである。

A I	é, ó - φ	zero phase
A II	é, ó - o	o-phase (o が可能)
A III	é, ó - e, o	e-phase (e も可能)

例えば、A II の段階を表していると思われるものには次のようなものがある。

IE	
*sén-o-s 「古い」	> Gk. ἔνος 「昨年の」, Skt. sánas, Lith. sėnas
*néw-o-s 「新しい」	> Gk. νέος, Skt. návas, Lat. novus, Hitt. nēwit/nēwid/
*wérg-o-m 「仕事」	> Gk. (F) ἔργον, Germ. Werk
*néb <sup>h</sup> -os 「雲」	> Gk. νέφος 「雲」, Skt. nábhas 「水蒸気」 Hitt. nēpiš/nébis/, Russ. nébo 「天」
*poH <sub>2</sub> -i-mén 「牧人」	> Gk. ποιμήν, Lith. piemuõ

ご覧のように、この o-phase は \*e と \*o の共存できるあらゆる語幹にわたっている。また、第 I 章 4. での語例をとってみてもおわかりのとおり、amphikinetic type の強格は実は皆この段階であった。しかるに他の mobile types, holokinetic type, protero-

kinetic type, hysterokinetic type は第 I 章 1. ~ 3. の語例が示すように皆 AI の段階であり、amphikinetic type がこれら 3 タイプよりものちの成立であるというのはまず間違いのないことなのだ（ついでに言うならば、AI の例として挙げた \*dy-<sup>4</sup>eu-s, \*di-w-ós 「天帝」も hysterokinetic type である）。

### Ⅲ. amphikinetic type の誕生

#### i) amphikinetic type の生成の契機とその 2 つの成立過程の可能性

そもそも amphikinetic type は何故必要になってきたのだろうか。これが一般名詞だけであれば何もこんな複雑なアブラウトタイプは要らなかった。有生物名詞だけに限ると hysterokinetic type で十分だし、無生物名詞は proterokinetic type と acrostatic type に所属し、要するに一般名詞はその有生性によってくっきりとわかれるのだから（I 章参照）、何も両者がごちゃまぜになったタイプは要り用もなかった。よって、問題の amphikinetic type が一般名詞に淵源するとは思えない。

確かにこのタイプには中性の集合名詞が所属するが（I 章 4. \*wéd-ōr 「水」 etc）、それでもわざわざ有生物名詞を組み込む必然性は何一つない。したがって、このタイプは、（被修飾名詞によって）その性が変わりうる形容詞や分詞に端を発したと思われるのである。事実 I 章 1. にも例として挙げたとおり、形容詞には \*még- $\mathbb{H}_2$ -s（中性 \*még- $\mathbb{H}_2$ ）「大きい」のように有生物・無生物いずれの要求にも合う holokinetic type のものがあるし、このことがここでの推測を裏づけているとも思われるのである。よって、結果から先に言うと、私はこの amphikinetic type には 2 つの成立過程があったと思っている。

その 1 : proterokinetic type と hysterokinetic type との混成

その 2 : holokinetic type から

#### ii) amphikinetic type の生成過程その 1

u-語幹の形容詞の一部には複合語形でアヴェスタ語 sg. N. -bāzāuš (< IE \* -b<sup>h</sup>eH<sub>2</sub>g<sup>h</sup>-ōu -s) G -bāzvō 「～な腕を持った」 (Gk. π ῥ ὶ σ 「腕」) といった amphikinetic type と思われる形がある。こういった amphikinetic type の形容詞 u-語幹は次のような観点

から proterokinetic type と hysterokinetic type が混合してできたのではないかと私は考えている。

まず、印欧祖語のアブラウトの定石から考えてみて非常に不思議なことではあるのだが、u-語幹の形容詞に関しては語根母音が何階梯であるか定まっていない。

e 階梯

Gk. ῆ δ ὕς, (Dor.) ᾗ δ ὕς, Skt. svādús, Lat. suāvis < \*swēH<sub>2</sub>d-ú-s 「甘い」  
Lat. levis, Lith. leñgvas (o-語幹) < \*lénġ<sup>w</sup>-u-s 「軽い」

o 階梯

Gk. π ο λ ὕς < \*polH<sub>1</sub>-u-s 「多くの」  
Lith. svarùs, Hitt. suwāru(n.) /swáru/ < \*swór-u-s 「重い」

零階梯

Gk. π λ α τ ὕς, Skt. pṛthús < \*pl̥-t-H<sub>2</sub>-ú-s 「幅広い」  
Gk. ἕ λ α χ ὕς, Ved. raghús < \*H<sub>1</sub>lŋġ<sup>w</sup>-ú-s 「軽い」

これは、大部分のu-語幹形容詞の語末が単主 \*-u-s 対 \*-u-m 属 \*-ou-s 与 \*-ew-ei etc. 生産的な close inflection に整理されているように、印欧祖語の後期に強格-弱格間のアブラウト交替が廃されて、形容詞ごとにばらばらにどちらかの階梯で統一された結果であると考えるのである。

つまり、形容詞は本来は名詞のように有生物は hysterokinetic type で、無生物は proterokinetic type で屈折したと思われる。例えば、「多くの」という語では次のようであったのではないかと私は考えている。

<有生物> hysterokinetic type

印欧祖語

複主 \*pl̥H<sub>1</sub>-éw-es (> \*polH<sub>1</sub>-éw-es) = Gk. π ο λ έ ε s (Hom) (B417 etc.)

属 \*pl̥H<sub>1</sub>-w-óm = Gk. π ο λ λ ὼ ν

<無生物> proterokinetic type

印欧祖語

単主/汎 \*pélH<sub>1</sub>-u/\*pólH<sub>1</sub>-u=Goth. filu, Gk. π ο λ ύ

属 \*p<sub>l</sub>H<sub>1</sub>-éu-s (>\*polH<sub>1</sub>-éu-s) =Gk. (Hom) π ο λ έ ο ς (υ 25etc.)

: Skt. purú-s

▲ 印欧祖語「多くの」

つまり、本来、一つの形容詞はそのパラダイムにおいて e - o - φ の三つの階梯を持っていたわけで、これが印欧祖語の後期から末期にかけて一つの形容詞は一つの階梯で統一されていったのである。そして印欧祖語の末期にアクセントが接尾辞部に固定するに至り (Gk. ἡ δ ύ ς (Dor.) ἄ δ ύ ς, Skt. svādús 「甘い」 <\*swādú-s <\*sweH<sub>2</sub>d-ú-s Gk. π λ α τ ύ ς, Skt. prthú-s 「幅広い」 <\*p<sub>l</sub>tH<sub>2</sub>-ú-s)、語根母音も零階梯のものになっていったのである。

しかし、o-phase の時期にはこれを別の方法でまとめようという動きも起こった。すなわち、有生物名詞を修飾するか無生物名詞を修飾するかでいちいち異なったパターンの活用をしていたのでは余りにも不便なので、こと形容詞に関しては性の違いは度外視して、強格語幹は強格語幹で、弱格語幹は弱格語幹で統一しようというわけだ。そこで弱格語幹に関しては「多くの」の例でもおわかりのとおり、有生物・無生物で語根が零階梯で同じなので、とりあえずは有生物の hysterokinetic type のもので統一された。しかし、強格語幹に関してはどちらかのもので統一するというにはならず、両方の特徴をとるということになり、かけ合わせが行われた。

$$C_1éC_2-C \text{ (無生)} \times C_1C_2-éC \text{ (有生)} = C_1éC_2-ē-C \rightarrow C_1éC_2-ōC \\ \text{〔有生物対格 } C_1éC_2-oC-m \text{〕}$$

無生物の場合での語根部 e 階梯を残そうと思えば、アクセントが語根部に来て、そうになると非強勢位置の接尾辞部に \*e が来てしまい、o-phase に違反することになる。したがってこの部分は非強勢位置にも立ちうる基本母音、すなわち \*o に変わったのである。ここに有生物・無生物共用の amphikinetic type ができあがり、それは名詞にも応用されたのである。

ただ、このタイプが全てhysterokinetic type とproterokinetic type の混成によってできたのかという点決してそうでもない。ともかくも以上が私の考えであるが、Robert S. P. Beekesはamphikinetic type はholokinetic typeからきたと主張している。

iii) holokinetic typeとは

まず、命名の由来であるが、holo-とはギリシア語の ὅλος「全体の」の語幹であり、名詞が屈折する際、格によってアクセントの落ちる位置が変わるが(→I章)、それが主格では語根、対格では接尾辞、属格以下の斜格では語尾とパラダイム内での全ての部分で動いていくタイプである。

Beekes(1985)によると20くらいの語がこのタイプに所属するとのことであるが、中には専ら伝存諸言語の主格同士の組み合わせでしか出てこないものもかなり含まれているので、実際には13例くらいに減り、その中から更に疑わしいものを削り取ると8つくらいに落ち着く。I章で\*még-H<sub>2</sub>-s の例を挙げておいたが、それ以外には次のようなものがある。

①「姑」(女性)

IE OCS

単主\*swékr-uH<sub>2</sub>-s svekry =Skt. śvaśrūs, Germ. Schwieger

対\*swekr-éuH<sub>2</sub>-m svekrovъ =Russ. с в е к р о в ъ

属\*swekr-uH<sub>2</sub>-ós svekrъve

②「家畜」(男性)

IE

単主\*pek-u-s =OLith. pēkus

対\*pk-éw-m =Av. -fšaom

属\*pk-w-ós =Ved. paśvās, Av. pasvō

③「屍、死者」(男性)

IE

Av. Gk. (詩)

単主\*nék-u-s

nasus νεκυς

対 \* $\text{nk}^{\text{h}}\text{-éw-}\text{m}$  > \* $\text{nék}^{\text{h}}\text{-ow-}\text{m}$  nasāum  $\nu \acute{\epsilon} \kappa \nu \nu$  (< \* $\text{nék}^{\text{h}}\text{-u-}\text{m}$ )  
 属 \* $\text{nk}^{\text{h}}\text{-w-ó}$  (nasāvō)  $\nu \acute{\epsilon} \kappa \nu \text{os}$   
 :0Br., 0Corn, ancou, 0Ir. éc

④ 「土地、属州」 (女性)

IE Av. OPers.  
 单主 \* $\text{dés-yu-s}$  daiṅhuš dahyāus (< \* $\text{dés-yōu-s}$ )  
 対 \* $\text{d(e)s-yéw-}\text{m}$  daiṅhaom dahyāum, -āvam (= < \* $\text{dés-yow-}\text{m}$ )  
 複主 \* $\text{dés-yow-es}$  daiṅhāvō dahyāva  
 古代ペルシア語は amphikinetic type 化した形からの発展。

⑤ 「母」 (女性)

	(Dor.)	(Hom.)	Skt.	OLith.
单主 * $\text{méh}_2\text{-tr}_\text{ç}$ > * $\text{méh}_2\text{-tēr}$	$\mu \acute{\alpha} \tau \eta \rho$	$\mu \acute{\eta} \tau \eta \rho$	mātá	=móte
対 * $\text{meh}_2\text{-tér-}\text{m}$	$\mu \bar{\alpha} \tau \acute{\epsilon} \rho \alpha$	$\mu \eta \tau \acute{\epsilon} \rho \alpha$	mātáram	=móteri
属 * $\text{meh}_2\text{-tr-ós}$	$\mu \bar{\alpha} \tau \rho \acute{o} \varsigma$	$\mu \eta \tau \rho \acute{o} \varsigma$	mātúr	
位 * $\text{meh}_2\text{-tér-i}$		$\mu \eta \tau \acute{\epsilon} \rho \iota$	mātári	

主格は \*-tēr 以外の再建は不能であるが、これは \*-r\_ に終わる形が余りにも中性的だったので (Gk.  $\acute{\eta} \pi \alpha \rho$ , Lat. iecur 「肝臓」 Hitt. ešḫar, Ved. ásrk 「血」 Gk.  $\omicron \check{\theta} \alpha \rho$  「(動物の) 乳房 etc.」)、\* $\text{pH}_2\text{-tér}$  「父」や \* $\text{d}^{\text{h}}\text{ugH}_2\text{-tér}$  「娘」 (=Lith. duktė.) といった他の親族名称に歩調を合わせて \*-tēr に置き換えられたものと思われる。なお Hom. Gk. の  $\mu \eta \tau \acute{\epsilon} \rho \iota$  は Il. 22. 53 や Od. 20. 326 etc. に現れる形である。

⑥ 「月 (曆の)」 (男性)

IE	Gk.	Lith.	Av.
单主 * $\text{méh}_1\text{-n-s}$	$\mu \epsilon \acute{\iota} \varsigma$	mėnuo	/maah/
対 * $\text{meh}_1\text{-n-és-}\text{m}$	( $\mu \check{\eta} \nu \alpha$ )	mėnesi	
属 $\text{meh}_1\text{-n-s-ós}$	$\mu \check{\eta} \nu \nu \text{os}$ (Lesb.)	(mėnesio)	māṅhō

Gk. の属格形の他方言の形は (Thess.)  $\mu \epsilon \iota \nu \nu \acute{o} \varsigma$ , (Boeot.)  $\mu \epsilon \iota \nu \acute{o} \varsigma$ .



Lith. *mėnuo* < IE\**méh<sub>1</sub>-n-ōs* で amphikinetic type 化しつつある形で、リトアニア語で鋭アクセントをとるのはこれが本来 *VH<sub>2</sub>* >  $\bar{V}$  の結果できた長母音であることを示しており、アヴェスタ語の hiatus と共に \**H<sub>1</sub>* の存在を示唆する。

⑦「願う」能動現在分詞男性形

単主 \**wék-nt-s* = Hitt. *wekkanz(a)*: Gk.  $\acute{\epsilon}\kappa\acute{\omega}\nu$  (< \**wék-ōn*)  
 対 \**uk-ént-m* = Skt. *uśántam* : Gk.  $\acute{\epsilon}\kappa\acute{o}\nu\tau\alpha$  (< \**wék-ont-m*)  
 属 \**uk-nt-ós* = Skt. *uśátás*  
 cf. Gk. (Cret.)  $\acute{\Phi}\acute{\epsilon}\kappa\alpha\sigma\sigma\alpha$  (f.) < IE\**wék-nt-ih<sub>2</sub>*  
 Gk. では「進んで、自由に」という意味変化を起こしている。

⑧「風」(男性) < 「吹いている」〔能動現在分詞男性形〕

IE

単主 \**H<sub>2</sub>wéh<sub>1</sub>-nt-s* > \**H<sub>2</sub>wéh<sub>1</sub>-nt-o-s*  
 対 \**H<sub>2</sub>uH<sub>1</sub>-ént-m* = Hitt. *ḫuwantan*  
 属 \**H<sub>2</sub>uH<sub>1</sub>-nt-ós* > *ḫuwantaš*  
 主格は各言語で更に次のように変化した。  
 $\alpha$ . > \**wénto-s* > \**wénto-s* > Lat. *ventus*, Goth. *winds*  
 $\beta$ . > \**H<sub>2</sub>wéh<sub>1</sub>nto-s* > \**wé?ato-s* > Av. /*vaata-*/  
 元になった動詞は次のとおり。  
 IE\**H<sub>2</sub>wéh<sub>1</sub>-t-i*〔現三単〕 > Gk. (Hom.)  $\acute{\alpha}\eta\sigma\iota$  (du. 3  $\acute{\alpha}\eta\tau\omicron\nu$ ,  
 pl. 3  $\acute{\alpha}\epsilon\iota\sigma\iota$ ), Ved. *váti*

以上のうち、⑤の「母」に関しては Beekes (1985: 133, 174-6) は Skt. の属格形 *mātúr* と語根部の full grade (\**meH<sub>2</sub>*-と *e* 階梯) とを根拠に static inflection だとしている。すなわち、主 \**méH<sub>2</sub>-tr* 属 \**méH<sub>2</sub>-tr-s* だが、但し、これは「兄弟」\**b<sup>h</sup>réh<sub>2</sub>-tēr* (< \**-tr*)、対 \**b<sup>h</sup>réh<sub>2</sub>-ter-m*、属 \**b<sup>h</sup>réh<sub>2</sub>-tr-s* (> Skt. *bhrātā*, *bhrātaram*, *bhrātur*) になぞらえているわけで、「兄弟」の場合はアクセントが語根部に固定しているので static inflection でいいのだろうが、「母」の場合はそうではないので、私はこれはむしろ holo-kinetic type だったと見た。実際に「兄弟」の場合はギリシア語でも、意味こそ「氏族

の一員」と変わるが、 $\phi\rho\acute{\alpha}\tau\eta\rho$  対  $\phi\rho\acute{\alpha}\tau\epsilon\rho\alpha$  とアクセント位置は全く移動しない。「母」と「兄弟」のアクセントに関してはゲルマン語にも傍証があるが、ここでは煩雑になるのでとりあげない。

ただ、以上の諸例を概観して言えることは holokinetic type というのは確かに数こそ少ないものの、印欧祖語に存在したのは間違いないのであるが、非常に壊れやすいタイプであり、むしろ消失の途上にあったということである。Beekes(1985)はこの holokinetic type が hysterokinetic type や amphikinetic type になったと言っているが、むしろこれはあらゆる mobile types になったと言うべきであって、ここに挙げた確実だと考えられる 8 例を検証して見ても次のような結果が出るのである。

- α. 主格で \*s を伴う mesostatic type H<sub>2</sub>-語幹
  - ①「姑」\*swekr-úH<sub>2</sub>-s, G.\*swekr-úH<sub>2</sub>-os へ
- β. u-語幹 (有生物) open inflection
  - ②「家畜」\*pék-u(-s), G\*pék-w-os へ
  - ③「屍、死者」\*nék-u-s, G\*nék-w-os へ
- γ. amphikinetic type
  - ④「土地、属州」\*dés-yōu-s, Acc.\*dés-yow-m へ
  - ⑥「(曆)月」\*méH<sub>1</sub>-n-ōs へ
  - ⑦「願う」分詞\*wék-ōn, Acc.\*wék-ont-m, G\*uk-nt-ōs へ
- δ. hysterokinetic type の男性 athematic nt- 分詞
  - ⑦「願う」分詞\*uk-ént-s, G\*uk-nt-ōs へ
- ε. proterokinetic type H<sub>2</sub>-語幹

①はヴェーダ・サンスクリット語を見れば明らかだし、実際にアクセントが接尾辞部で固定していたらしいことは \*k がゲルマン語では g で現れていることよりも察することができる。おそらく主格に \*s を持つ iH<sub>2</sub>-語幹も (「牝狼」\*wlk<sup>v</sup>-iH<sub>2</sub>-s 呼 \*wlk<sup>v</sup>-i 対 \*wlk<sup>v</sup>-iH<sub>2</sub>-m 属 \*wlk<sup>v</sup>-iH<sub>2</sub>-os) この要領で成立したのだろう。②はヴェーダ語 (pásu, pásvas) に、③はギリシア語 (上例) に open inflection としての形が現れている。γ、δの④⑥⑦もそれぞれでの例証を見ていただきたい。

したがって、holokinetic type は acrostatic type (「夜」\*nóg<sup>v</sup>-t-s 属 \*nég<sup>v</sup>-t-s,

「水」\*wód- $\grave{r}$  属\*wéd- $\grave{n}$ -s)を除く全てのタイプになったとでも言うべきである。そしてこの中に問題のamphikinetic type も含まれるのである。

iv) amphikinetic type の生成過程その2

以上の事実を総合するにamphikinetic type は次のようにしてholokinetic typeから成立したとも考えられる。

IE ( $\phi$ -phase期)	IE (o-phase期)
単主*wék- $\grave{n}$ t-s (=Hitt. wekkanza)	→ *wék- $\acute{o}$ n (=Gk. ἔκων)
対*uk- $\acute{e}$ nt-m (=Skt. uśántam)	→ *wék- $\acute{o}$ nt-m (=Gk. ἔκόντα)
属*uk- $\grave{n}$ t-ós (=Skt. uśátás)	→ *uk- $\acute{n}$ t-ós

同様にして他のタイプもamphikinetic type へと移行して行ったのであり、ギリシア語ではopen inflection になった「屍、死体」(Ⅲ iii) ③)もアヴェスタ語ではamphikinetic type化しつつある。印欧祖語において対格の接尾辞部の母音が\*eではなく\*oであったらしいことはアヴェスタ語においてはāで現れていることより(IEの開音節位置の\*oはIn.-Ir. ではāとなる) -Brugmannの法則)窺い知ることができる。すなわち、この語では次のような組み替えが行われた。

IE ( $\phi$ -phase期)	IE (o-phase期)
単主*nék- $\acute{u}$ -s (=Gk. νεκός)	→ *nék- $\acute{o}$ -s
対*nk- $\acute{e}$ w-m	→ *nék- $\acute{o}$ w-m (=Av. nasāum)
属*nk- $\acute{w}$ -ós (=OIr. éc)	→ *nk- $\acute{w}$ -ós

印欧祖語において数少ないōu- 幹は(Gk. ἥρωσ 属ἥρω(F)os「半神、英雄」)このようにして成立したと考えられるわけだが、これはōi- 幹(Gk. πειθώ 呼πειθού 属πειθούς「説得」)と異なり、主格において\*-sを持つことが特色である。そして実際にこのōu- 幹がholokinetic typeからできたらしいことは、Ⅲ iii) ④)を見てもわかるとおり、同じインド=イラン語派、しかも同じイラン語支派でありながら、Av. はholokinetic type、OPers. はamphikinetic typeと両者の間をさまよっている

例があることからもおわかりいただけるだろう。

ともかくもこの組み換えは印欧祖語の「中期」にはかなり盛んに行われたようで、有生物名詞s-語幹もⅢ iii) ⑥より見るに、少なくともその一部はholokinetic typeから成立したと思われる。そして、実際のデータでは Gk.  $\alpha \dot{\iota} \delta \acute{\omega} s$  「恥」 対  $\alpha \dot{\iota} \delta \tilde{\omega}$  属  $\alpha \dot{\iota} \delta \circ \tilde{\upsilon} s < \alpha \dot{\iota} \delta \acute{o} o s$  という風に語根の形は変わらず、接尾辞部が主格延長の有無によって長短の対立を示すのみであるものの、本来はこの有生物s-語幹がamphikinetic typeであったらしいことは次の例より窺い知ることができる。

印欧祖語「曙、暁」(女性)

単主 \*H<sub>2</sub>éus-ōs = Gk. (Hom.)  $\eta \acute{\omega} s$ , (Aeol.)  $\alpha \tilde{\upsilon} \omega s$  : Lat. aurōra

対 \*H<sub>2</sub>éus-os-m = Gk. (Hom.)  $\eta \tilde{\omega} < * \tilde{\alpha} F \tilde{\omega} < * \alpha \tilde{\upsilon} h\acute{o} h \alpha$

属 \*H<sub>2</sub>us-s-ōs = Ved. uṣás (主 uṣás 対 uṣásam)

また、このタイプは主格において\*-ōs と延長階梯を持っていることも(他にはLat. honōs 「名誉、ほまれ」、odōs 「香り」etc.)これが本来amphikinetic typeであったことを窺わしめる。

要するにamphikinetic type はこのようにholokinetic typeからの組み換えによっても成立した。但し、注意しておかなくてはならないのは、holokinetic typeというのは基本的には有生物名詞であるので(Ⅲ iii) ①-⑧参照)、そこからできあがったものは有生物名詞であるということである。やはり、Gk.  $\tilde{\epsilon} \epsilon \lambda \delta \omega \rho$  (A41, A455etc.) 「願望」、 $\tilde{\epsilon} \lambda \omega \rho$  (ν 208etc.) 「獲物、餌食」、 $\pi \epsilon \lambda \omega \rho$  (B321etc.) 「怪物、化物」、 $\tau \epsilon \kappa \mu \omega \rho$  (A526etc.) 「確かなしるし」といったホメロスに出てくるC<sub>1</sub>éC<sub>2</sub>-ōrタイプの中性的名詞はholokinetic typeからとは言いにくいのであり、ここにholokinetic typeオンリーからの生成の限界がある。したがって、やはりⅢ ii) で述べたような生成過程を考えなくてはならない。

そしてまた、現にC<sub>1</sub>éC<sub>2</sub>-ōrタイプのamphikinetic type を示す中性的名詞が印欧祖語にも存在したらしいことは次のような証拠によっても示される。

IE	Hitt.	Ved .	Gk.	Umbr.
複主/附 *wéd-ōr	widār		$\tilde{\upsilon} \delta \omega \rho$	utur: Lith. vanduō

属 \*ud-n-ós    A<sup>h</sup>·<sup>h</sup>-as    udnás    ὕδατος (<\*ud-n-t-ós)

位 \*ud-én(-i)                    udán(i)    (ὕδατι)    utne

▲印欧祖語「水」(amphikinetic type)

IE

複主/対 \*swép-ōr = Lat. sopor(m) 「熟睡、昏睡」

属 \*sup-n-ós = Gk. ὕπνος

▲印欧祖語「眠り」(amphikinetic type)

つまり、その中に有生物名詞(男性名詞・女性名詞)も無生物名詞も抱合するamphikinetic typeはこのように2つのルートを経て成立した活用形態であり、ここに集合数としての中性名詞(上の「水」「眠り」、前の段落でのGk. の「願望」「獲物」etc.)をも含むこのタイプの複雑さがあるのである。

#### IV. 印欧祖語の先史におけるamphikinetic type の位置づけ

Ⅲ章でamphikinetic type というのはproterokinetic type やhysterokinetic type, holokinetic type, そしてここでは詳しく論じなかったが、Ⅲ iii) の終わりの方で例だけ出しておいたacrostatic type よりも後に成立したタイプで、しかも2つの生成過程を経て成立したタイプだというのがわかった。これは要するに、印欧祖語の内部で基本母音\*e, \*oとアクセントとの相関関係なる制約が緩み始めた、いわば印欧祖語の再編成期にできたわけで、この相関関係が最終的には崩れてゆく途上での中間段階のタイプだと言えるわけである。主格で\*-o-s, 対格で\*-o-m (中性では共に \*-o-m)、呼格で\*-e というo-語幹も恐らくはこの時期の産物であり、印欧語に広く対応が見られるo-語幹には\*wílk\*-o-s 「狼」(Skt. víṅkas, Gk. λύκος, Lat. lupus, Lith. vilkas, Goth. wulfs etc.) のような語根部零階梯のものとならんで、語根部がe階梯でそこにアクセントが落ちるものが多い(Ⅱ章での \*nēw-o-s, \*sén-o-s, \*wérg-o-m) ことはこのことを暗に示唆している。

\*swékuro-s 「舅」 > Skt. śváśuras, Lith. šėšūras, Russ. свёкор,

Germ. Schwäher, Gk. (Hom.) ἔκλυρός

\*péd-o-m > 「場所」 Gk. πῆδος, Hitt. pēdan/pēdan/, Skt. padám

そして、o-語幹ができたことによって、印欧祖語では動詞も名詞も急速に語幹の固定化の方向へと向かっていった。尤もo-語幹自身は語根名詞やhysterokinetic type 名詞の属能格が主格として再解釈され、\*-ósの\*oまでが語幹と認知されるようになって成立した模様であるが（「狼」\*wlk̑\*-ós > \*wlk̑\*-ó-s > \*wlk̑\*-o-s 松本(1988:8-11)）、母音終わりの語幹を作り出すことによって、語幹の固定化をはかったのである。このことによって名詞は強格（主格・呼格・対格）と弱格（属格・与格・具格・位格）の間の母音交替とアクセント位置による語幹の対立をなくしたし、動詞でも単数と双複数、直接法と接続法と希求法の間に対立が同様にしてなくなっていったのである。

いわば、伝存諸言語に残る各mobile typesというのは印欧祖語の深い深い霧の彼方にある先史時代の化石とでも言うべきものであり、なかんずくamphikinetic type はその中でも新しく成立したおかげで、ほぼ同時期に成立したと考えられるo-語幹による語幹の固定化の波に洗われて余り残ることはなかった。本当に綺麗な形で残っているのはSkt. pánthās 対pánthām 属pathás「道」、Av. paṇtā 対paṇtaṃ 属paθō (< IE\*pént-oh₂-s 対\*pént-oh₂-m 属\*pnt-H₂-ós) くらいであり、amphikinetic typeは急速に崩れて行ったのである。

さらには、語幹の固定化によってGk. γένος, 属γένεος「誕生、血統、種族、民族」やs-語幹によるpseudo-hysterokinetic typeの形容詞Gk. εὖ-γενής 属εὖ-γενέος「生れの良い」が生ずるに至り\*e, \*oとアクセントとの相関関係は完全に崩れ、ここにⅢⅢ)の語例のあとで若干述べてあるmesostatic type(例:「牝狼」\*wlk̑\*-íH₂-s 対\*włk̑\*-íH₂-m 属\*włk̑\*-íH₂-os)という新しいタイプが生じた。

すなわちamphikinetic typeとは印欧祖語の「中期」(Beekes (1985:157)の言うo-phase)という印欧祖語の先史における大きな再編成の流れの中であって2つの過程によって成立したタイプであり、印欧祖語の古い体質が壊れて、語幹の固定化へとひた走ってゆくその途上に生まれた中間的な屈折タイプなのである。

【参考文献】

- ekes, Robert S.P. (1969) The Development of the Proto-Indo-European Laryngeals in Greek. Mouton (The Hague·Paris).
- \_\_\_\_\_ (1985) The Origins of the Indo-European Nominal Inflection (=Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft 46). Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- \_\_\_\_\_ (1990) "The Historical Grammar of Greek: A Case Study in the Results of Comparative Linguistics." Linguistic Change and Reconstruction Methodology. edited by Philipp Baldi, 305-329. Mouton de Gruyter (Berlin·New York).
- Ik, R.D. (1986) The Origins of Indo-European Quantitative Ablaut (=Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft 49). Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- 本 裕. (1988) 「アヴェスタ語」. 『言語学大辞典』(三省堂, 東京, 昭和63), 世界言語篇(上), 122-132.
- ryłowicz, Jerzy (1968) Indogermanische Grammatik. Band II Akzent·Ablaut. Carl Winter Universitätsverlag (Heidelberg).
- ndonell, Arthur Anthony (1910) Vedic Grammar. (1977年に名著普及会(東京)より復刻板).
- 本 克己. (1988) 「印欧語における能格性の問題」. 『東京大学言語学論集』88 (昭和63), 風間喜代三先生退官記念号, 1-19.
- sch, Ernst (1974) Wortbildung der homerischen Sprache zweite, völlig überarbeitete Auflage. Walter Gruyter (Berlin·New York).
- Helmut (1976) Historische Grammatik des griechischen. Wissenschaftliche Buchgesellschaft (Darmstadt).
- merényi, Oswald (1990) Einführung in die vergleichende Sprachwissenschaft. 4-te, durchgesehene Auflage, Wissenschaftliche Buchgesellschaft (Darmstadt).
- 日 和彦·大城 光正. (1990) 「印欧アナトリア諸語概説」. 大学書林(東京, 平成2).

The Formation Process of Noun Paradigms  
of Amphikinetic Type  
in Proto-Indo-European

Ikuma YOSHIDA

The aim of this paper is to solve one of the problems on the prehistory of Proto-Indo-European. That is to say, concretely it is how amphikinetic type was formed, which is one of the ablaut types of noun paradigms in Proto-Indo-European.

In conclusion, I think that this type was formed through two processes. One is the mixing of hysterokinetic type (animate gender) and proterokinetic type (inanimate gender), two of the five mobile types (of noun paradigm ablaut) which are thought to have existed in Proto-Indo-European. Another is the transformation from holokinetic type.

And in this paper I tried to demonstrate this theory with the transition of the correlation between \*e/\*o and the position of accentuation in Proto-Indo-European inflectional forms, as the key to the solution of the question.

(原稿受理日 1993年7月 2日)